

Aspect, An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems

by Bernard Comrie

London: Cambridge University Press

1976 ix + 142 pp

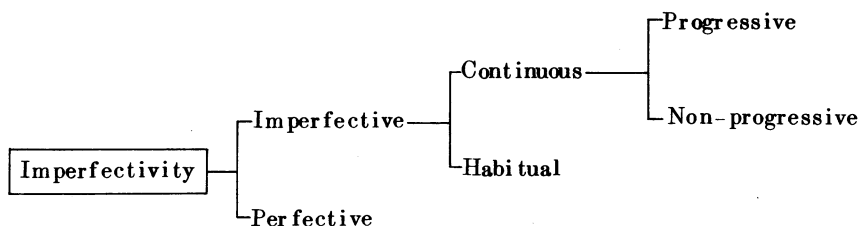
久 屋 孝 夫

Scheffer の著作が aspect のひとつである imperfective の下位区分である progressive を通時的に、しかも英語に限って扱っているのに対して、本書は aspect 全般をしかも各国語を狩猟して具体例で傍証しながら専ら共時的に観察していく立場をとる。Scheffer のように取扱い方に班がなく偏りもない概説書である。P.H. Matthews: Morphology に続く Cambridge Textbooks in Linguistics の第2巻を成す。Preface で断っている如く、特定の言語の aspect だけを扱ったり、各国語に具現されている諸 aspect を互いに比較することに主眼を置くのではなく、一般言語理論の見地から、その一部を構成するものとしての aspect を浮き彫りにする意向らしい。論をすすめるにあたっては時に aspect の semantics に注意を払うと主張している。

Introduction, Appendix を除いた6つの章は、1-3章が二つの主要アスペクトである imperfective (vs perfective), perfect (vs non-perfect) と、それに随伴する諸問題の検討、4章が aspect と tense のかわり、5章が aspect の morphological, syntactic 両面において具現された諸形式の概観、6章は Marked/Unmarked の対立から見た aspect、以上から構成されている。

Introduction では例によって aspect を tense らどのように distinguish するかが最初に問われるが Comrie は tense が主として現在時との関連から問題となっている時間の situation を決定するのに対して、aspect は他の situation とはかわりなくその situation を内部から規定するものと見る。すなわち situation-external time (tense) と situation-internal time (aspect) の相違であると言う。このような time reference がすべての言語に同じように lexicalise/grammaticalise されるわけではないことが、このような意味論的考察の普遍性を無効にするものではない。(第0章)

Comrie の分類によれば imperfectivity の体系は、概略次のようになると言う。(第1章)



imperfectivity の体系には個々の動詞の持つ内在的性質の意味論的対立 (e.g. *punctual* vs *durative*, *semelfactive* vs *iterative*, *telic* vs *atelic*, *state* vs *dynamic*) が深くかわることも見落せない。一例をあげれば、英語動詞 *cough* が内在的に持つ *punctuality* のため、*he coughed*, は *semelfactive* な解釈 (i.e. *one single cough*) に、*he was coughing* は *iterative* な解釈 (i.e. *a series of coughs*) を必然的に受けることになる。(第2章)

Perfect については従来通り、ある状態をそれに先立つある状態と関連づけるものと定義するが、そうすると Comrie も述べているように introduction での *aspect* の用法とは異質のものに言及していることになりはすまいか。ここを明らかにしてもらいたい。(第3章)

Aspect と *tense* のかわりについては、必ずしもこの二つが区別されるものではないことを各国語の例をあげ説いている。*narrative present* の問題、*tenseless language* にも *aspect* はあること、*aspect* が *voice (passive)* と同一形態をとりうること、などにも触れる。(第4章)

Aspect の諸形式については、ロシア語などに見られる *prefixing* という *morphological (synthetic)* なものと、*imperfective* を表現する迂言的な *locative* などの *syntactic (analytic)* なものに言及する。また *state* の2つの型、*contingent* と *absolute* の重要性、*Turkish*, *Bulgarian* にみられる *inferential* が *perfect* と形態上同一である理由が、どちらも出来事をそのまま伝えるのではなく現在時との関連で述べられることにも注意を喚起する。(第5章)

特徴的な記述は、ある *aspect* が *marked* であるかないかを3つの *criterion* で決定するという第6章であろう。その *criterion* とは、ある *aspect* の *category* が (i) *semantics* の立場から *overt expression* の形で *optional* か、(ii) *less morphological material* を持たないか、(iii) *less frequent* であるか、である。例をあげれば、(i) *It. sto scrivendo*, *Sp. estoy escribiendo* は *progressive meaning* を排除することなく *simple* な *scrivo*, *escribo* にとって代わられる故 *marked*, (ii) 英語 *perfect*, *progressive* は *periphrastic* である故 *marked*, (iii) (i) - (ii) の基準の適用できぬロシア語などは *frequency* の少ないものが *marked* (Josselson の統計によると *imperfective* は *perfective* よりやや少なく用いられる)。この *criterion* も与えられる *context* が異なれば当然変わることもありうる。(第6章)

最後の Appendix は A, B とあり、A には本文で引用された各国語の系統図と、主要な言語において利用される *aspect* の一覧、及びその代表的研究書への言及、B には最近の *aspect* 研究の3つの方法

(i) localist theory (Anderson, Miller), (ii) feature analysis (Haltorf), (iii) Model – theoretic semantics (Dowty)が僅かにスペースを与えられている。各言語の研究者は本書によって aspect という限られた範囲ではあるが、一見多様な世界の諸言語に存在する言語の普遍性を認識し、言語研究の新しい perspective を与えられるだろう。